

不眠同盟

ヒコ

沙漠に行きたかったのは、不毛な大地にたえずみたくったから。そこでわたしはなにを見つめるだろう。灼熱の昼と極寒の夜。極限のものこそが、真に美しいと云ったのは誰だったか。

素足で駆けると、沙の粒子が足の指をすり抜けた。粉砂糖を敷き詰めたらこんな大地ができあがるのだろうか。つかみどころのない足場のむこう、オアシスがわたしを待つ。オアシスでわたしはあなたを待つ。ひとは不毛を求めながら、結局は樂園に逃げ込むのだろう。欠けた太陽と歪んだ月が通りすぎ、そのたびに水面には別れを惜しむようにさざ波がたつ。身体に巻きつけた布が風をはらんでわたしを連れ去ろうとするが、現実には打ち付けられたこの身は、風に乗るには重すぎた。干からびた咽喉では呼吸すらままならないのに、水が咽喉を通らない。あなたが来るのを見とげずに、沙に沈む。水面は、わたしのために小さな波をおこしてくれただろうか。

深海から這い上がるように、目覚めは訪れた。暗い室内に

は青い光が漂っている。浅い眠りのあとの頭は重く、手足は冷えきって血が通わない。水をかくように起き上がって、カーテンを開ける。三日月に誘われて、窓硝子まで開け放った。呼吸は凍てついた夜に白く盛大に広がり、風に流されて消えた。

この月を知っている。今、同じ月を見ている。

大切なひとを送っていった。春と云うには寒すぎるよく晴れた日に、わたしは往復のきつぷを買ひ、そのひとは片道のきつぷで電車に乗り込む。引越しの日どりは大安を選んだ。新しく住むのは、坂に囲まれた街。家は坂の中腹にあり、近くには駅とコンビニと銭湯がある。ひとのいい大家さんがわたしたちを迎えてくれた。

部屋の掃除をすませた後、夕食は外でとった。寒さに肩をすくめながら坂をのぼる途中、そのひとはふと立ち止まって夜空を見上げた。星はない。少しもやのかかった三日月だけが、わたしたちを見下ろしていた。そのひとは「月だね」とただそれだけを云い、わたしは「きれいですね」と応じた。「昨日よりは少し欠けたかな」「むしろ大きくなってませんか」月の満ち欠けは一日ではよくわからないから、わたしたちは適当なことを云いあう。

買ったばかりのカーペットの上に横になっても、荷物のない部屋ではやることがないから他愛ない話をした。

「最近寝つきが悪いんですよ」

「それ、いつも云ってるね」

「そうでしたっけ。でも、規則正しい生活がしたいんですよ」

「寝よう寝ようと思うほど、眠れなくなるものだよ」

その夜はなにもない部屋で、毛布を分かち合って眠りについた。その日ばかりは、ゆるやかに心地よく眠りがわたしを包んでくれた。となりにいるひとの寝つきの良さに影響されたいせいかもしれない。

勝手に救われて勝手に尊敬し、勝手に決めてゆくとした。

わたしの想いは、もしかして行動や表情ににじみ出ていたのだろうか。そうだとしたら、ものすごくほろろかしい。

でも、そのひとはわたしの心を見透かしたようにはじめは映画に誘ってくれた。それから面白い物に出かけて、しだいにそのまとう空気に魅了され、同じ世界をのぞきたいと思うようになった。たくさん食事に行ったり、呑みにも行った。古い街に旅に出た。劇場にも連れて行ってもらった。一杯のお茶で何時間もカフェに居座ったこともある。誘うのに理由はいらなかった。そのひとと会うことが、同じ時間を過ごすことが、理由だと云ってもよかった。穏やかな時間は、鍾の入った沙のように流れ落ちてゆく。

「ほしいのは恋人じゃなくて、ソウルメイトなの」しゃべり明かしたある朝方にそのひとは云った。ソウルメイトという

言葉がすつと沁みこんだ。誰もこのひとを、付き合うという行為で縛ることはできないのだ。何度か口の中でソウルメイト、とつぶやいてみると、その言葉の持つ可能性があふれ出すように感じた。恋人じゃなく、友達じゃなく。もつと高次の関係。魂で結びついた者。

「いいですね、憧れますよ」……見つかりましたか、とは訊けなかった。一生かけても見つからないものだと言われるのが怖かった。わたしはそのひとのソウルメイトになれる可能性を抱いたままだったのだ。「わたしも欲しいです。きつといますよ、ソウルメイト」

あなたみたいになりたいと、云って見たことがあった。

「わたしのすべでは、スタイルだから。くだらないよね」

自嘲気味に笑って、そのひとはカップを口に運ぶ。

「いえ、素敵だと思います」

いつも洗練された格好をして、映画にだってカフェにだってひとりで行ってみせる。そのくせ他人と時間を共にすることともいとわない。わたしにはないその生き方が憧れだったのに、いとも簡単に否定してのけるそのひとに、近付きたくてたまらなかった。

「わたしみたいにならないうらななくなったらおしまいですよ」

離れたくないと云って迷惑がられたくはなかったし、そんな言葉を口に出したところで、実現し得ないことも知っている。

朝になって、狭い部屋には不釣り合いな大量のダンボールが運び込まれた。他人の荷物を前にして、わたしにできることはなにもない。自分の部屋すら片付けられない人間に、他人の部屋の整理などできるはずはない。カラーボックスを組み立てて、洗濯物を干して、それだけだった。はじめから、なにもない部屋で夜を明かすお供としてついでにきたのだ。

「お友達ですか」と引越しやに問われ、迷いながら正直に答えた。友達ではない。ましてや親戚でもない。「それは遠くまで……」物好きなの、という視線に笑って応えることしかできなかった。

片付けが進んでも進まなくても、電車の時間はやってくる。時間が止まりやしないかと、月並みなことを考えた。

駅まで送ってもらい、ひとりで帰途についた。大切なひとのきつぷに復路はない。じゃあまた。それが最後に交わした言葉だった。

坂に囲まれた街は大切なひとだけをかくまうようにしてわたしから引き離れた。街は気に入った者だけをその腕に抱き込み、わたしにはその土地に住む資格を与えてくれない。

寒さに窓を閉めたところで電話が鳴った。液晶で確認すると、時刻は深夜をすこしすぎたところだった。

ねえ、とついさつき途切れた会話をはじめるようにそのひとは云った。夜半すぎのかすれた声。「眠れないんだけど」

このひとは眠れぬ夜の話し相手にわたしを選んでもくれたのだ。

「そう云われましても……眠れないなんて珍しいですね。いつそ寝なきやいいんじゃないですか」

「そうかなあ」

「眠れるまで起きてればいいんですよ。寝よう寝ようとする、逆に眠れなくなりですよ」

ひと月ぶりの声は、なんの変わりもなく心地よく耳に響いた。距離も時間もこえて、ふたりの間にある空気が変わらないう。寝起きでなければきつとわたしの声はずんでしまっただろう。

「今日の月、きれいですよ」「カーテンを開けたらぞかれる」

「電気を点けなきや平気ですよ」電話の向こうで、カーテンを開ける音がする。「ああ、三日月だね」感想は短い。

「ハルシオンで知ってますか」

「なんか聞いたことあるような。なんだったっけ」

「鳥です。遠い海のうえで生まれるんですけど」

「へえ、そういうの好きそうだねえ」

「云われると思った。どうですか、新しい暮らしは」

「なんとかね、やってるよ。坂が多くて疲れるけどね」

愚かなわたしは、戻りたいとか寂しいとか、そんな言葉を期待していたのだろうか。この手の届かない場所で新たな生

活をはじめたひとに、置いていかれる自分に気づきもせずには
「……待つてますから」「なにを」「いつでも泊まりにきて大
丈夫ですから。なんで笑ってるんですか」「べつに。こつちに
もくればいいよ。遊びにきて遅くなって帰るのがいやになっ
たら、泊まっていけばいい」「そんなこと云ったら、本当に押
しかけますよ」

また低く笑つてから、大切なひとはあ、と声をあげる。「思
い出したよ、ハルシオン。たしか、睡眠薬だったよね」

「そうです。けっこう強力なやつらしいですよ」

「そんなに眠れないの」

「いえ、名前が気に入ってるだけです。いい夢を見させてく
れそうじゃないですか。でも、いちど睡眠薬に頼ったら、手
放せなくなりそうですよね」

「じゃあ、眠れないときには電話しなよ」

え、耳を疑いながら恐る恐る問う。「いいんですか」

「睡眠薬には頼りたくないんですよ。名前につられて呑んじ
やだめだよ」

「はい、肝に銘じます。あの、わたしにも、いつでも電話し
てくださいね」

「もしかしてさつき、寝てたの」

「ちようど起きてました。足が冷えて眠れなかったんです」

「お風呂にでも入りなよ」

「お風呂といえは、銭湯に行きましたか」

「うん。おばあちゃんばかりだったけど、快適だった」

「今度連れていってください」

「うん。そのうちね」

電話はじゃあまた、と云つて切られた。特別な言葉は必要
ない。次に会うときはまた、ふと途切れた会話を続けるよう
に話をはじめまるのだろう。わたしは月が描く床の模様を踏ん
で立ち上がり、浴室へ向かう。もう眠気はない。

熱いシャワーを浴びて手足に血がめぐったら、散歩にでも
行こうと思った。桜が咲くのももう間近で、夜半すぎでもそ
んなに寒くはないはずだ。出かけても行くあてはないから、
コンビニかスーパーをまわつて明日の朝食を買おう。

沙漠に行きたい気持ちに変わりはない。でも、なぜ不毛に
心惹かれるのかはわからない。己の不毛な心を、さらなる不
毛で癒すために行くのだろうか。

次の夢では、オアシスの水に触れてみようと思う。自分の
手で泉にさざ波をたて、冷たい水で咽喉をうるおし、そうし
て月と太陽にあいさつを試みよう。

ひとはきつと、不毛の中でしかオアシスの恵みを感じられ
ないから沙漠へ赴くのだろう。そしてわたしは、オアシスで
わたしを待つていてくれる誰かを探しに何度でも沙漠を求め
るのだ。